

題目：日本の一般病棟におけるスピリチュアルケアに基づく看護実践のための
教育プログラムの開発

研究指導教員：水嶋陽子

学籍番号：11600034

氏名：狩谷恭子

要旨

本論文は、一般病棟で最期を迎える終末期がん患者に対するスピリチュアルケアに焦点を当てた看護実践の問題を指摘し、その問題を解決するための一般病棟の看護師に対する「スピリチュアルケアの教育プログラム」の開発を目指した論文である。本論文は、2部から構成されている。

第Ⅰ部では、緩和ケアの定義とその歴史的経緯、日本の緩和ケアの現状、ならびにスピリチュアルケアの実践と教育の問題について論じた。そして、死にゆく過程の患者へのスピリチュアルケアの実践には、人間の生と死にかかわるスピリチュアリティの理解と、他者との適切なコミュニケーションスキルの習得という看護教育の充実が必要である。スピリチュアルケアの実践に向けた教育に必要な理論的・方法論的な視点として、WatsonとTravelbeeの看護理論と、Flickのtriangulationのアプローチ(多元的研究手法)の一つである質的研究として村田の現象学的アプローチ、そしてSkinnerの行動分析学的アプローチについて概観した。その結果、スピリチュアルケアの実践の問題の解決には、多元的研究手法がスピリチュアルケア実践の教育に援用可能と考え、量的な質問紙調査と、質的研究ならびに行動分析学の視点に対応する実験的な研究をもとに、スピリチュアルケアに有効な教育プログラムの開発が可能であると考えた。

第Ⅱ部では、実証的な研究として3つの研究を実施した。研究1では、一般病棟の看護師が抱えるスピリチュアルケアの困難を把握するために、看護師111名に対して質問紙調査を行った。その結果、一般病棟の看護師は、終末期にある患者とのコミュニケーションに辛さを感じて、スピリチュアルケアの実践に極めて困難を感じていることがわかった。研究2では、スピリチュアルケアに対する一般病棟の看護師の困難感が、どのような心理・社会的構造になっているのかを明らかにするために、看護師15名と、緩和ケアの認定看護師6名に対して面接調査を実施した。面接結果を質的帰納的に分析した結果、一般病棟の看護師は、終末期がん患者やその家族と適切なコミュニケーションが取れないことで、患者のスピリチュアルペインへの対応に困難を感じ、その解決に向けて認定看護師にサポートを求めていることがわかった。そこで研究3では、スピリチュアルケアに必要な看護実践能力であるコミュニケーションスキルの習得を目的とした教育プログラムを、行動分析学の視点で策定し、多層ベースライン実験計画に基づいて実施した。プログラムは、講義、死の疑似体験訓練、モデリングとフィードバックを伴ったロールプレイ訓練の3つの介入項目で構成されるSSTであった。実験の結果、参加者たちは講義によってスピリチュアルケアの知識を習得し、死の疑似体験訓練をとおして自分たちの死と人生の喪失体験を意識できるようになった。そしてロールプレイ訓練によりスピリチュアルケアに必要な具体的なコミュニケーションスキルを身に着けることができた。参加者たちは、習得したスキルを患者との実際の関わりで実感するようになり、スピリチュアル

ケアの実践を積極的かつ前向きに捉えられるようになった。プログラムの中でも、参加者全員がロールプレイ訓練の最有効性を主張し、認定看護師によってもプログラムの有効性が認められた。一般病棟の多くの看護師は、スピリチュアルケアの実践に困難を感じていたが、SST教育プログラムによって、スピリチュアルケアの困難感も解消することが明らかになった。

Keywords: 終末期患者のスピリチュアルケア，一般病棟の看護師，看護教育プログラム，
ソーシャル・スキル・トレーニング，行動分析学